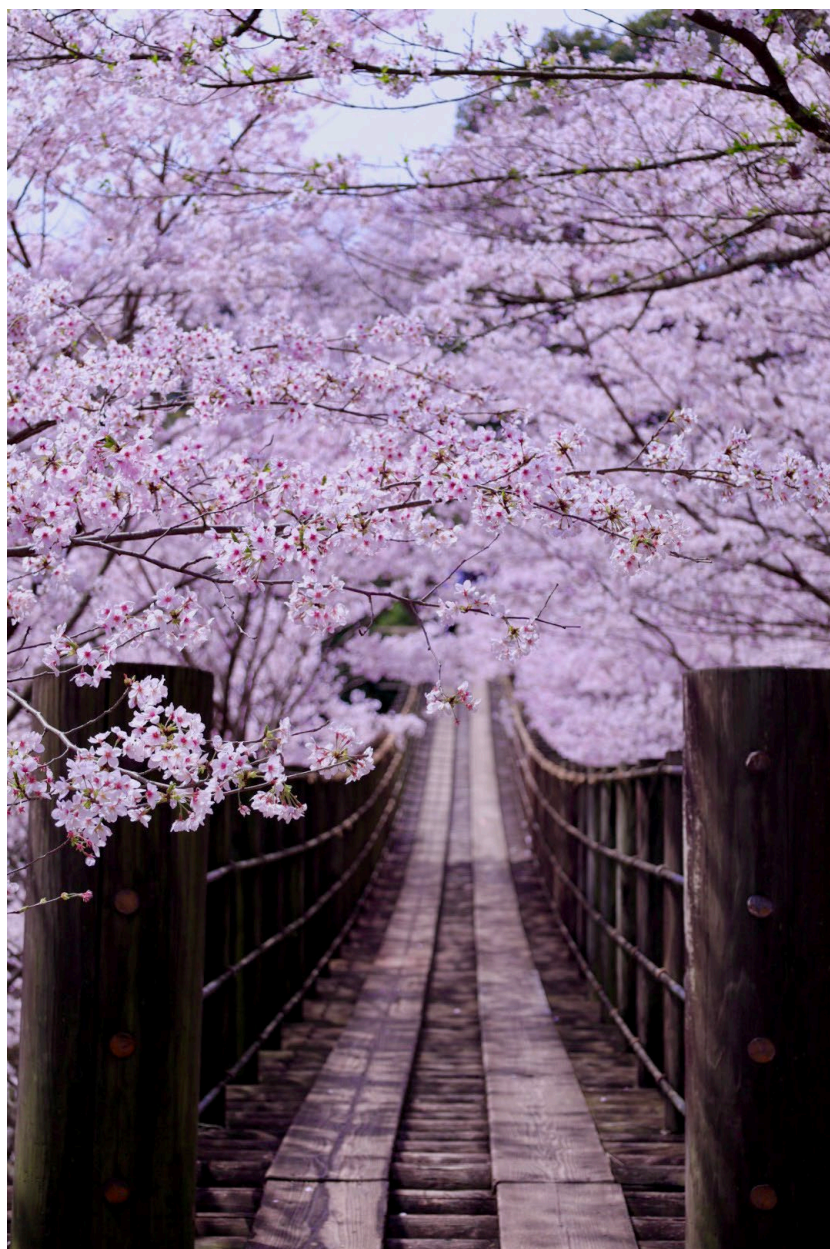


**第 180 回**  
**日耳鼻長崎県地方部会学術講演会**  
**【プログラム・抄録集】**



**令和 8 年 4 月 12 日(日)10 時 00 分～**  
**長崎大学医学部 ポンペ会館**

## ご案内

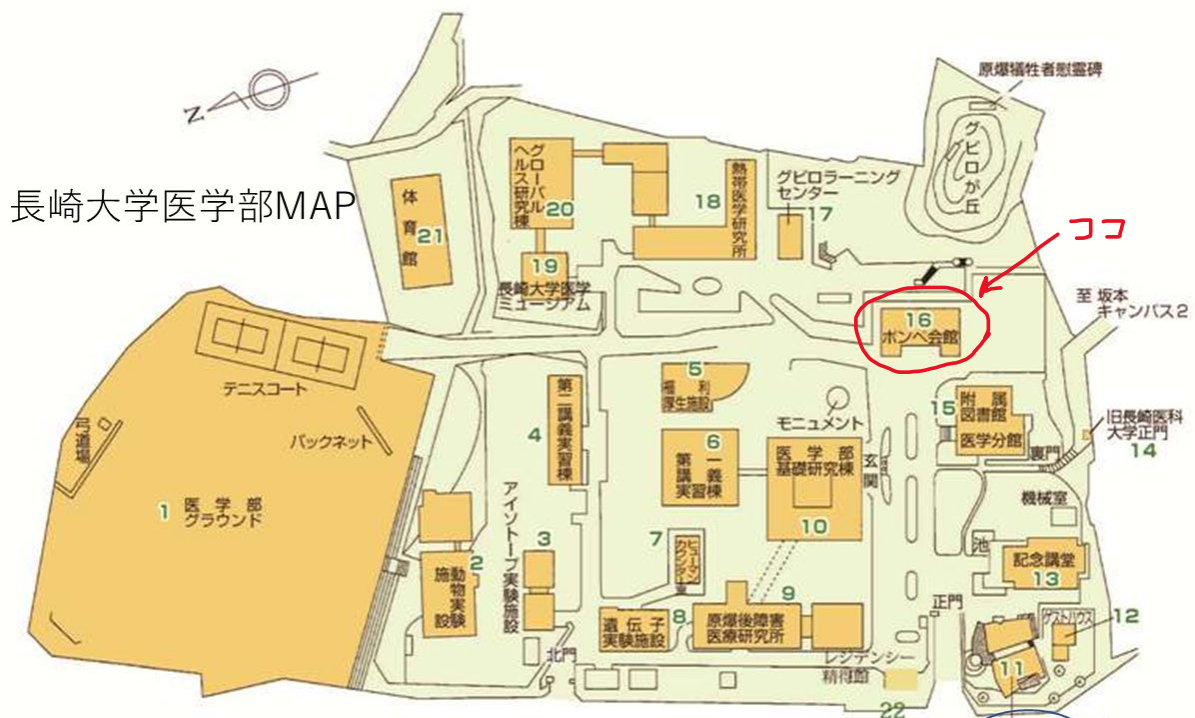
【会 場】長崎大学医学部 ポンペ会館

【連 絡】長崎大学耳鼻咽喉科学教室:095-819-7349

長崎大学病院 11 東病棟(耳鼻科病棟):095-819-7391

【駐車場】駐車場料金は医学部駐車場を利用できますが、長崎市内の先生方はできるだけご遠慮ください。

【受 付】会員カードによる受付を行います。 専門医の学術集会参加単位の受付も兼ねておりますので、会員カードをご持参ください。



## 演者の方へ

【発表時間】1題10分(発表7分、質疑3分)時間厳守

【発表PC】Windows11、PowerPoint2019

- \* 事前に Windows PC で文字ズレ・文字化けの確認をしてください。
- \* データは USB フラッシュメモリ等でご持参の上、開演15分前までに、所定の PC に保存し、動作確認を済ませてください。

**【会長挨拶】10:00～10:05**

熊井良彦(長崎大学)

---

**【一般演題】**

**第 I 群:10:05～10:35**

座長 高島寿美恵(長崎大学)

---

- I-1 根治切除困難な進行甲状腺癌に対するレンバチニブ低用量投与の使用経験  
小山法碩(長崎大学)
- I-2 診断に苦慮した骨破壊を伴う上気道限局型多発血管炎性肉芽腫症疑い症例  
塚本愛麗子(長崎大学)
- I-3 中咽頭前壁に発生した硝子化明細胞癌症例  
福守雄太(長崎医療センター)

**第 II 群:10:35～10:55**

座長 佐藤智生(長崎大学)

---

- II-1 乗り物酔いとめまいに伴う嘔気の関係から考察しためまい患者数の男女差  
野田哲哉(野田耳鼻咽喉科)
- II-2 地方医師会会員を対象とした認知症と難聴の関連性に対する意識調査-耳鼻咽喉科  
医在籍、及び不在の各医師会へのアンケート調査-  
高崎賢治(たかさきクリニック耳鼻いんこう科・アレルギー科)

**【令和 8 年度日耳鼻長崎県地方部会総会】10:55～11:20**

司会 佐藤智生

---

1. 会計報告
2. 役員改選
3. 連絡事項

**【令和 7 年度日耳鼻全国会議代表者会議報告】11:20～11:55**

---

- |               |       |
|---------------|-------|
| 1. 保険医療委員会    | 小室 哲  |
| 2. 学校保健医療委員会  | 佐々野利春 |
| 3. 乳幼児医療委員会   | 神田幸彦  |
| 4. 福祉医療委員会    | 橋本 清  |
| 5. 医事問題委員会    | 江上直也  |
| 6. 産業・環境保健委員会 | 梅木 寛  |
| 7. 専門医制度      | 熊井良彦  |

**【財政再建委員会報告】11:55～12:00**

司会 高野 篤

---

## 【一般演題 第 I 群】

---

### I —1

## 根治切除困難な進行甲状腺癌に対するレンバチニブ低用量投与の使用経験

○小山法碩、大野純希、西 秀昭、熊井良彦  
長崎大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科

【緒言】分化型甲状腺癌(DTC)の治療は外科的切除が第一選択であるが、気管・大血管浸潤を伴う根治切除困難例や遠隔転移例では、外科的切除に加え、レンバチニブ(Len)などの薬物療法を含めた集学的治療が必要となる。Len の標準開始量は 24mg であるが、瘻孔形成や致死性的出血などの重篤な合併症を生じる可能性がある場合は高用量投与が躊躇されることがある。今回われわれは、初診時に根治切除困難かつ高用量 Len は高リスクと判断した症例に対し、4mg の低用量投与により腫瘍制御を得た進行甲状腺癌 2 例を経験したため報告する。

【症例 1】76 歳女性。甲状腺乳頭癌の低分化転化疑い，cT4bN0M0。気管内腔までの浸潤，両側声帯麻痺を認め，準緊急で気管切開を施行。総頸動脈が全周性に取り囲まれ，根治切除不能と判断した。腫瘍の急激な縮小に伴う気管瘻孔形成や血管破綻のリスクを考慮し，Len4mg より開始した。画像検査や内視鏡での腫瘍評価を行い，必要に応じて休薬を挟みながら投与を継続し，現在まで腫瘍制御を維持している。

【症例 2】67 歳女性。甲状腺乳頭癌，cT4aN1aM1。気管壁への浸潤を伴う上，腫瘍尾側の血管操作が困難であり，根治切除困難と判断。微小な肺転移はあるものの，まずは局所制御が優先と判断し，Conversion surgery も念頭に Len4mg より開始した。腫瘍は縮小傾向を示し，切除も提案したが，最終的に患者希望により内服加療を継続した。経過中に脳梗塞で一時休薬し，その間に腫瘍再増大を認めたが，内服再開後は再び縮小し，現在まで腫瘍制御を維持している。

【考察】Len は高い奏効率を示す一方，重篤な有害事象や瘻孔形成，出血のリスクが報告されている。既報では低用量 Len 投与でも一定の腫瘍制御が得られる可能性が示されており，自験例でも 4mg からの開始と慎重な経過観察，必要に応じた休薬により，致命的合併症を回避しつつ長期病勢制御が得られた。一方，低用量投与は標準治療ではなく，有害事象のリスクは残存することも報告されており，慎重な症例選択と経過観察が重要である。

### 【参考文献】

- 1) Oteri V, et al.:Therapeutic Efficacy of a Very Low/Low Dose of Lenvatinib in Advanced Radioiodine-Refractory Thyroid Cancer: A Real-World Series from a Single Center. *Cancers* 2025;17:2372.
- 2) Yamazaki H,et al.:Efficacy and tolerability of initial low-dose lenvatinib to treat differentiated thyroid cancer. *Medicine* 2019;98:10.

## 診断に苦慮した骨破壊を伴う上気道限局型多発血管炎性肉芽腫症疑い症例

○塚本愛麗子<sup>1)</sup>、木原千春<sup>1)</sup>、二宮直樹<sup>1)</sup>、吉田晴郎<sup>2)</sup>、牟田倫花<sup>3)</sup>、熊井良彦<sup>1)</sup>

1) 長崎大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科

2) 長崎医療センター 耳鼻咽喉科

3) 嬉野医療センター 耳鼻咽喉科

【緒言】多発血管炎性肉芽腫症(GPA)は①全身の壊死性肉芽腫性血管炎、②上気道・肺を主座とする壊死性肉芽腫性炎、③半月体形成腎炎を三徴とする ANCA 関連血管炎である。<sup>1)</sup>今回、骨破壊を伴う副鼻腔炎を呈し ANCA 陰性かつ病理所見も非典型で診断に難渋した上気道限局型 GPA 疑い症例を経験した。【症例】73 歳男性。右眼痛・鼻出血を主訴に前医受診。CT で上顎骨に骨破壊を伴う副鼻腔炎を認め生検を兼ねて ESSⅢ型を施行したが、病理は慢性炎症のみであった。術後症状が再燃し抗菌薬治療も無効で当科紹介。ANCA・真菌抗原は陰性で、造影 CT でも骨破壊と軟部陰影を認めた。再生検で中小血管レベルに血管炎を示唆する所見を一部に認めた。感染症・悪性腫瘍が否定的で進行性の骨破壊という臨床経過を踏まえ、上気道限局型 GPA を疑いリツキシマブ、PSL、アバコパンによる寛解導入療法を開始した。治療後、骨破壊の進行は停止し自発痛は消失、CRP 陰性が持続したが、5 か月後の画像で一部に残存病変を認めシクロフォスファミドによる再寛解導入療法へ移行し現在も治療効果を評価中である。【考察】上気道限局型 GPA は病理で典型的な所見が得られにくく PR3-ANCA 陰性例も少なくないため確定診断が困難な場合が多い。<sup>2)</sup>一方、限局型 GPA は一定割合で全身型へ進展することが報告されており、全身型は限局型と比較して生存率が低いとされる。<sup>3)</sup>そのため治療抵抗性の骨破壊を伴う副鼻腔炎では、悪性腫瘍を除外した上で ANCA 関連血管炎を鑑別に挙げ、早期治療介入を検討する必要がある。

### 【参考文献】

- 1) 厚生労働省 難治性疾患政策研究事業 ANCA 関連血管炎の診療ガイドライン作成班. ANCA 関連血管炎の診療ガイドライン 2023. 2023.
- 2) 原淵保明, 他.: 血管炎症候群-新しい分類と名称- 微小血管性血管炎・多発血管炎性肉芽腫症(GPA)の上気道病変と ANCA 関連血管炎性中耳炎(OMAAV). 最新医学. 2013;68:187-195.
- 3) Iudici M, et al.: Localized versus systemic granulomatosis with polyangiitis: data from the French Vasculitis Study Group Registry. Rheumatology (Oxford). 2022;61:1129-1138.

## 中咽頭前壁に発生した硝子化明細胞癌症例

○福守雄太<sup>1)</sup>、前田耕太郎<sup>1)</sup>、石飛俊介<sup>2)</sup>、神田悠志<sup>1)</sup>、三浦史郎<sup>2)</sup>、田中藤信<sup>1)</sup>

1) 長崎医療センター 耳鼻咽喉科

2) 長崎医療センター 病理診断科

**【緒言】**硝子化明細胞癌(Hyalinizing clear cell carcinoma:HCCC)は、全唾液腺腫瘍の1%未満とされる極めて稀な低悪性度唾液腺癌である。病理学的には硝子化間質を伴う明細胞の増殖を特徴とし、分子生物学的には t(12;22)(q13;q12)転座による EWSR1-ATF1 融合遺伝子が腫瘍形成の重要なドライバーとされる。今回われわれは、中咽頭前壁という極めて稀な部位に発生した HCCC の 1 例を経験した。その臨床経過に若干の文献的考察を加えて報告する。

**【症例】**67 歳女性。咽頭違和感を自覚し前医を受診した。喉頭内視鏡検査で舌根部に表面不整な腫瘍性病変を認め、精査加療目的に当科を初診した。腫瘍は舌根部に限局し、喉頭蓋谷への浸潤は認めなかった。内視鏡下生検では低悪性度の粘表皮癌が疑われた。造影 MRI 検査では、腫瘍は粘膜下層に留まり外舌筋への浸潤は認めなかった。同年舌骨上咽頭切開法による腫瘍切除術を施行した。術後神経障害はなく機能温存できた。病理組織学的検討および分子生物学的検索(FISH 法)で HCCC と確定診断した。切除断端は陰性であったため、術後追加治療は行わず嚴重な経過観察を継続している。

**【まとめ】**中咽頭前壁の HCCC は報告が極めて稀で、臨床診断には難渋する。明細胞を呈する他疾患には高悪性度の腫瘍も含まれるため鑑別は重要であり、融合遺伝子の検索は確定診断の決定打となり得る。HCCC は低悪性度腫瘍であり外科的完全切除が基本となるが、晩期再発や転移が稀に生じるため、今後嚴重な経過観察が必要である。

### 【参考文献】

- 1) Albergotti W.G., et al.:Hyalinizing clear cell carcinoma of the head and neck: Case series and update. Head Neck 2016;38:426-433.
- 2) Yang X-H., et al.:Hyalinizing clear cell carcinoma of salivary gland origin in the head and neck: clinical and histopathological analysis. Int J Oral Maxillofac Surg. 2018;47:692-698.
- 3) Zhao X., et al.:Clinicopathological analysis of hyalinizing clear cell carcinoma in the head and neck.Braz J Otorhinolaryngol. 2025;91:101676.
- 4) Hernandez-Prera J.C.,et al.:Reappraising hyalinizing clear cell carcinoma: A population-based study with molecular confirmation. Head Neck. 2017;39:503-511.

## 【一般演題 第Ⅱ群】

---

### Ⅱ—1

#### 乗り物酔いとめまいに伴う嘔気の関係から考察しためまい患者数の男女差

○野田哲哉

野田耳鼻咽喉科

2023年にめまいに伴う嘔気と乗り物酔いとの関係についての報告を行ったが、いくつかの問題点があった。その中のひとつは、女性のめまい患者では乗り物に酔いやすい者の割合がめまい以外の患者よりも高いことであった。男性のめまい患者も乗り物に酔いやすい者の割合が高いのではないかと考え、新たなめまい患者を対象として、再調査を行って検討した。めまい患者での乗り物に酔いやすい者の割合が高い理由ばかりではなく、女性のめまい患者数が多い理由も説明できたので報告する。

2021年8月から2025年7月までのめまい患者は、男性が222例で、女性が561例であった。嘔気を伴っていた者は男性が117例(52.7%)で、女性が329例(58.6%)であった。男性では乗り物に酔いやすい者は48例(21.6%)であり、嘔気を伴っていた者は117例で、そのうち乗り物に酔いやすい者が40例(34.2%)であり、嘔気を伴っていない者は105例で、そのうち酔いやすい者は8例(7.6%)であった。女性では乗り物に酔いやすい者は209例(37.3%)であり、嘔気を伴っていた者は329例で、そのうち乗り物に酔いやすい者が150例(45.6%)であり、嘔気を伴っていない者は232例で、そのうち酔いやすい者は59例(25.4%)であった。男女ともに統計学的に嘔気を伴う者は乗り物に酔いやすい者の割合が高かった。めまい以外の患者においては、乗り物に酔いやすい者は男性が13.0%で、女性が26.7%であり、男女ともに統計学的にめまい患者の方が酔いやすい者の割合が高かった。

めまい患者がめまい以外の患者よりも乗り物に酔いやすい者の割合が高い理由は、嘔気を伴う者の受診率が際立って高かったからだと考えられる。乗り物酔いに男女差があるが、嘔吐中枢の機能に男女差があり、女性が男性より嘔気や嘔吐を起こしやすい。めまいに伴う嘔気も女性に多いことが推定されるが、実際には嘔気を伴う割合に男女差がなかった。これも嘔気を伴う者の受診率が際立って高かったからだと考えられる。その結果、めまい患者では女性の数が多くなる。

#### 【参考文献】

- 1) 野田哲哉: 乗り物酔いとめまいに伴う嘔気の関係. 耳鼻 2023; 69: 253—261.
- 2) 野田哲哉: 乗り物酔いとめまいに伴う嘔気の関係(第2報). 耳鼻 2026; 72(in press)

## II-2

### 地方医師会会員を対象とした認知症と難聴の関連性に対する意識調査-耳鼻咽

#### 喉科医在籍、及び不在の各医師会へのアンケート調査-

○高崎賢治<sup>1)</sup>、神田幸彦<sup>2)3)</sup>

1) たかさきクリニック耳鼻いんこう科・アレルギー科

2) 医療法人萌悠会耳鼻咽喉科神田 E・N・T 医院

3) 長崎ベルヒアリングセンター

はじめに: 中年期以降の難聴対策は、認知症リスクの軽減との報告がある(1)。今回、佐世保市医師会と北松浦医師会の会員を対象に、認知症と難聴の関連性に対する意識調査を行ったので報告する。

対象と方法: 対象は、佐世保市医師会全会員 434 名、北松浦医師会全会員 35 名とした。説明書、及び 10 項目のアンケート用紙を、佐世保市医師会会員へは、2025 年 8 月 19 日から配布、回答期限を 10 月 24 日、北松浦医師会会員へは、10 月 12 日から配布、回答期限を 10 月 30 日とした。

質問項目は、認知症及びその早期介入への関心、難聴が認知症のリスク要因であることの認知度、難聴予防・補聴器使用について患者と話す頻度、日耳鼻学会 HP での補聴器相談医リストの公表の認知度、などとした。

結果: 回収件数は、佐世保市医師会で 91 件、北松浦医師会で 24 件であった。認知症への関心度、及び予防や早期介入への関心度は、ある程度関心がある以上で、佐世保市医師会は 88%と 87%、北松浦医師会は 78%と 83%であった。難聴が認知症のリスク要因であることの認知度は、佐世保市医師会で 82%、北松浦医師会で 70%であった。難聴と認知症の関連性への関心度は、ある程度関心がある以上で、佐世保市医師会で 87%、北松浦医師会で 79%であった。一方、難聴予防や補聴器使用が認知症予防に役立つ可能性について患者と話すとの回答は、佐世保市医師会で 55%、北松浦医師会で 62%であり、日耳鼻学会 HP の補聴器相談医リストの公表の認知度は、佐世保市医師会で 12%、北松浦医師会で 9%であった。

考察: 今回の結果では、両医師会会員は、認知症、その予防や早期介入、難聴と認知症の関連性に対する高い認識を持っているが、難聴患者に対する難聴予防や補聴器使用の情報が、両医師会会員には十分に浸透していないことが推察された。

#### 【参考文献】

- 1) 内田育恵: 加齢性難聴の啓発に基づく健康寿命延伸事業-日本医学会連 TEAM 事業-健康長寿実現のために難聴対策をとるべき理由. 日耳鼻 2025;128: 89-93.